

東京旭川会 会報



第 6 号 昭和59(1984)年1月25日
 発行 東京旭川会
 東京都新宿区西新宿7-4-3 升本ビル
 東京美装興業株式会社内
 TEL. (03)363-2721
 編集 東京旭川会会報編集委員会

総会と郷土訪問



いつにない熱気で参集

(詳細は二頁
と三頁へ)

トウキョウとアサヒカワを

結ぶ一大イベント



(上) 総会での北海道名産即売会には変わらぬ人気を集めた。
 (中央) 坂東市長、平岡会長も顔を見せてカンパイ。
 (下) 郷土訪問では市主催の歓迎パーティーが開かれた。



東京旭川会定期総会



総会に参加した幹部と来賓の皆さん。
左より太田顧問、小沢市議会議長、坂東旭川市長、平岡会長、
小樽山商工会議所会頭、小坂顧問。

第七回東京旭川会の総会、懇親会は晩秋の十一月八日、東京都千代田区赤坂の東急ホテル十四階金の間で盛大に開催された。

定刻より四時間も早く午後二時頃から世話役の幹部二十余人が集合し、一切の準備を進めるうち、同五時過ぎから次々と出席者が姿を見せ、来賓を含めて二百五十六人が会場を埋めた。

午後六時、坂東旭川市長はじめ来賓の市有力者が満場の拍手に迎えられて入場した。

総会は原公朗常任幹事の司会で開かれ、平岡会長が議長となって議事に

入った。五十七年度事業報告、収支決算報告(別掲参照)五十八年度事業計画と予算が八木祐四郎常任幹事から読み上げられ、竹原茂雄監事の監査報告が行なわれた。さらに会則一部改正(別掲)も満場一致で承認された。続いて役員改選は平岡会長の再選が承認され(他の役員については後刻別掲のように会長より委嘱された)総会とはどこおりに終了した。

懇親会は平岡会長の「旭川市長他の多数の来賓を迎えて十分に旭川市幹部の方と懇談願いたい」と開会の挨拶があり、引続きミス旭川山下美

千子さん、準ミス旭川三浦美加さんから平岡会長、御手洗副会長に花束が贈呈された。ついで坂東市長から「昨年は旭川創立六十周年、本年は旭川創立八十周年ということで多数の方が郷土訪問され、発展著しい旭川の姿をご覧いただき、又街づくりに協力いただいている。人口は東北北海道で三番目という大きな町になったが、開村九十三年、いまだ街になりきっていない所もある。今年は平年より十九日も早く初雪があり、冷害の影響も大きい、三十三万一千人の市民は不景気を吹き飛ばすべく頑張っております。本夕は旭川を故郷にする人が元気で集まり、九十歳を過ぎた方もご出席いただいて大変嬉しい」と挨拶があり、続いて大城栄子常任幹事より旭川市長へ花束の贈呈があった。

例年好評の福引景品の抽せん会は八木祐四郎常任幹事の進行で、ミス旭川、準ミス旭川の手で抽せんされ新巻鮭、東京下町の昭和史、ホームプレート、東亜国内航空旭川往復五割引券、往復無料券など総数一二四ポイントという豪華な景品に会場が盛り上がり、殊に東亜国内航空旭川往復無料券は、最高年九十一歳の岡和田精さんが金的を射止めて、会員より祝福をうけた。

一年ぶりに会う知人、友人など懐かしい顔ぶれと近況や、家族のことなど話はつきず、来年の再会を期して坂東市長からのお土産などをいただいて、予定の午後八時散会した。

なお会場には旭川市街図、九月に実施した郷土訪問旅行の写真が掲げられ、旭川橋詰商店提供の鮭、すじ子、貝柱、昆布などの海産物および旭川ラーメンの即売会が行なわれ、総売上げは五十四万三、八六〇円にのぼった。

●坂東旭川市長のことば

東京旭川会の会員の方が昨年第二回のふるさと訪問で旭川を訪れていただいた。これから毎年続ける予定と聞く。すばらしいことだ。秀峰大雪山とその裾野にひろがる山なみ、川の流れ豊かな平野、そのすばらしい雄大な自然のパノラマに包まれたふるさと旭川の懐にとび込んで、思う存分楽しんでいただきたと思う。私たちのふるさと旭川は、まだ生まれて九十四年、今伸び盛り、これからのまち、やらなければならぬことは無限だ。勇敢にそして着実に、二十一世紀にむけて誇れるまちとして、希望に満ちあふれ、人びとの心がふれ合うヒーローマンなふるさとづくりのため、一層の努力をする決意である。

●第七回総会出席者

◇来賓 旭川市長坂東徹、同市助役中島弘、同市商工部長波岸裕光、同市議会議長小沢仁良、旭川商工会議所会頭小樽山亨、同会議所専務理事原田敏雄、同会議所専務部長河野光司、旭川観光協会副会長金森耕造、同協会専務理事稲村健蔵、北海道倶楽部会長太田剛、東亜国内航空東京支店長鎌田晃、合同酒精社長野口正二郎、十勝社長大浦二郎、男山社長山崎与吉

◇会員 Ⅱ県二部、青木平三郎、足立教子、有地豪三、青野茂、板井一朗、伊集院実、入江正則、伊藤英子、五十嵐広三、井川正、板倉峰、石川陵一、石川ツル、泉清子、板倉美代子、石本チヨ子、伊藤一男、上草義輝、植田キヨ、氏家一衛、梅原音二、蝦名礼子、大宮正子、岡和田精、岡和田君子、岡崎まり子、大和田和宏、尾崎哲、大沢輝子、岡本静子、太田幸雄、折登昭三、荻野京子、奥原正枝、大城栄子、大村蔵、大室憲一郎、折登建憲、折登園枝、大久保藤次郎、大矢健、大石武夫、尾上一郎、太田剛、大野年夫、河村尚之、笠原貞夫、片貝美雄、加藤林四郎、河端昭雄、笠本真知、加藤辰雄、金谷音江、川田正則、河村正雄、加藤和俊、加藤竹紫、川口美智子、金津良三、加留部種子、神部泰、上川あい子、金子登、河野純子、金安勝雄、北島芳雄、菊地文男、木野工、菊地克郎、菊地拓、北川一智、菊地正、黒川仁、黒崎弘、久我幸雄、桑本平八、倉沢かつ子、久米秀子、神代秋夫、小林正一、小坂佐久馬、後藤正士、小池栄寿、鴻上修一、近徳子、小林栄仁、小林光政、古岡正枝、小樽山俊介、坂上博二、齊藤くに、笹谷享市、笹谷重矢、佐々木雄一、佐々木秀典、田嘉明、真原綾子、鈴木与之助、鈴木嘉明、真原綾子、鈴木与之助、鈴木

ミス旭川も花をそえて華やかに総会

一昨年、旭川空港のジェット機乗り入れを記念し、郷土訪問の旅が三泊四日で実施されましたが、旭商六十周年式典もあり、一〇〇名の旅行団となり大きな成果を収めて終了しました。

当時、毎年は無理でも二、三年に一回はこの旅行を企画したかどうかの意見が多く、幹事会でも前向きに検討することで意見が一致していました。

昨年に入り、六月頃から一部の会員の方から、前回の好評に應える意味もあり、また東高(旧旭中)の八十周年式典がある年でもあるので、第二回の旅行会を計画してはとの意見が出て、急ぎよ東亜国内航空と折衝の結果、往路は団体、復路は個人扱(一週間の往復期間中に各人の希望する日時で、かつ千歳、旭川の両空港発を利用)という、極めて巾のある好条件で受け入れを快諾していただき、市関係もスムーズに調整されました。期間に余裕がなかったことで、参加者がどの程度集まるか不安もありましたが、結果的に六十六名の参加となりました。

出発日の九月三十日は台風が去ったあとの快晴に恵まれ、昨年就航したエアバスA300で旭川に向かいました。前回同様旭川空港には市職員の方のお出迎えを受け、バスで旭川競馬場を見ながら高砂台レストハウスに向かい、十二時からの昼食会に出席。とくに今回は市議会の会期中で極めてご多忙のなか、坂東市長、中島助役、遠藤収入役が寸暇をさいてご出席いただき歓待を受けました。

昼食会は前年同様ジンギスカンなべを囲み、郷土の味を満喫。午後一時昼食会を終了、旭川駅前自由解散となり、東高の記念式典に参加す

地元側の大歓迎で旅はスケートした

る人、グループで小旅行をする人、ゴルフを楽しむ人、知人友人を訪ねる人等々それぞれ有意義な日程を過ごされたと思います。

今回も第一回同様、一名の取消者、遅刻者もなく、本当に会員皆さんのご協力に厚くお礼を申し上げます。

黄二線八十周年記念 母校回帰

旭中三十回 河村尚之

別れゆく姿のマントに小雪散る

君若かりし旭川の駅

吾々はこの母なる川、北の街、この校庭の風に吹かれて育った。北の自然に鍛えられ、その「時」の流れに育まれた。白銀のドラマの世界は一瞬の休息も無かった。希薄な大気は躍動し、五本松の落日に青春を謳歌した。時は移り世は変わった。そして、昭和五十八年十月一日(土)午前十時。

少年の鮭が親潮に乗って一万キロ以上の凍てつく北洋大回遊の旅立ちをし、母なる川に回帰する。黄二線と編上靴の少年達が限らない人生の風雪、ロマンを経て母なる川「旭中」に回帰する。

びん薄き君と語れば少年の昔の儘なり只懐しき

八十周年の式典の波は突兀七千有余尺大雪山は巍然たり……のリズムのつて流れる。見よ！残された木の人材を送った正面玄関は恰も過去の栄光をよそに余生を送る隠棲した人物の佇まいを思わせる。

歴史は時の彼方に流れ出る。集合解散は世の常である。然しどうして

に残しておきたい心、忘れられない心がある。それは恩師の心友の心である。八十周年記念資料館に失われた星霜を蘇らす。

真赤に燃えた大型ダルマストーブを囲んだ団欒の一時、そこには雄図に燃えた青春の覇気があった。やるせない青春の悶え、ロマンを追う姿もあった。この団欒の一時は永遠に心の灯として残る。挫折もあった。失意もあった。然し夫々はしたたかに歩みに歩んだ。その歩みの一歩、暫しの憩いに、不思議な「光」「支え」をもたらすもの、それは恩師の心、友の心である。

たち出て五本松の芝草に語りし友はありやあらずや……
新入生の歓喜を迎え、時には熱血

の雄弁に吾を忘れ、そして哀切のメロデーの中に恩師、友と訣別した講堂がある。おお懐しい！

突如花火が中天高くそして回帰した少年達よりの風船が限りなく彼岸の光明を求めて舞上る。ドット湧く歓声、拍手、それは後輩少年・少女達より万感をこめての贈り物であった。

歳月は休むことなく過ぎてゆく。この五年間の思い出は永遠の生命を持つ。共に築いて下さった先生方「友」に心から有難うと感謝する。

今や熟年、右手には「経験」という「磁石」、左手には「勇気」と「サイコロ」青空に向かって黙って決意する。

さあ、更に歩みに歩もう。



ヤングも参加してジンギスカン料理に舌づつみをうった。(高砂台レストハウスで)

木とよ子、須藤正一、杉山俊明、須藤智恵子、関口和子、関谷赴夫、世良保、田村昌士、武田陽子、竹原茂雄、種田小三郎、玉田郁生、田中義憲、竹内薫、高橋武夫、竹内幸子、武田範芳、武田妙子、田中吉夫、谷本ヒサ、田辺勝、田村ツマヨ、高島孝子、高橋正夫、竹田美光、高野哲男、谷原和子、谷口幸世、谷口要、竹田薫、田村世津子、千葉悦子、土屋初代、辻口文子、富岡裕行、土岐寅男、土井磨智子、富田基平、中村虎男、並木治子、長田孝雄、中野虎雄、中本和子、中山精二、中村敏江、中陳国光、中村節子、中山豊昭、中川千代、仲山栄一、中井律子、中田雪子、中島博子、内藤義弘、中山多美子、西田育子、西村明、新国園枝日光撰子、西村武市、野瀬ミツエ、野村トシ子、花輪元治、坂東幸子、橋本直久、長谷川健一、馬場量定、花輪音三、芳賀照雄、早川史郎、早川清一、八谷フミ、長谷川明子、萩野敏夫、坂東宗光、林輝一、蓮本稔、橋本裕子、橋本博治、服部仁、原公朗、羽島利雄、逸都敏、平岡敏男、久君勇雄、平野雅甫、久富勝次、広瀬芳一、二川ちえ子、二川武、福原博子、福居秀一、藤井繁、深沢幸子、藤田大三、船木トヨ、福田一、福居浩一、布施裕輔、本間敏弘、堀川和延、松原利治、前木敏、松永茂、牧田逸子、松井圭子、牧野彰、南栄二、三浦勤一、三浦美恵子、三浦規、御手洗正夫、宮下博夫、三宅一郎、造酒多津男、三浦英次、三浦正平、村上茂利、村井与吉、室谷文治、向井地博明、向井地和子、村本敏昭、村本裕子、武藤祐子、村上登志子、矢野正康、八木祐四郎、山本政二、山崎和子、山口二郎、横川正市、吉武恭一郎、吉田敏明、吉田千里、横峰昇、吉田克良、吉田律子、吉井啓蔵、渡辺敦子。

以上二四〇名(順不同・敬称略)

第七回東京旭川会総会・懇親会は、文字通り盛会であった。私の旭中時代の恩師であった笹谷郁正先生の令弟享一さん、令妹と夫岡和田精さん、やはり同じ関係にあり同時にクラスメートでもある二川武君らが、お顔を揃えている光景は、まことに盛会であった。若い時から謹厳実直といわれ、摂生のよい岡和田さんの九十一歳というご高齢は、旭川会が誇るに足るみごとな長寿である。

八十三歳の加藤林四郎さん、七十九歳の小池栄寿さんは旭川時代、歌人、詩人として交渉のあった私の先輩であるが、お二人がいまこの東京で久闊を叙して歓談しておられた姿は、ふるさとへの会にふさわしい光景であった。

席上、私は、幹事の南栄二さんから、第百生命保険に勤めておられる野瀬ミツエさんを紹介された。野瀬さんの夫君が、南さんの友人であるということだが、この野瀬さんは、私と小学校で同級であった大谷外吉君の令妹である。野瀬さんが札幌にいる大谷君と会ったとき、旭川会でも開かれたらその機会に、平岡に会ってみたいかどうかといわれたということであった。

私は、中央小学校時代の写真を一枚持っている。そして、この写真を昭和四十五年に出した非売品の雑文集「めぐりあい」に載せてある。説明として「大正九年、中央小学校男子五年生全員受持の中島(庄左衛門)先生と飯田(復鹿)校長」と書いてある。生徒全員六十九名、洋服を着

ているのは一人もおらず、紺または縞の着物におおむね袴をはいている。羽織を着ている者もいるところからみると、秋冷の候であったのだろう。そのなかに、まさしく大谷君が写っている。

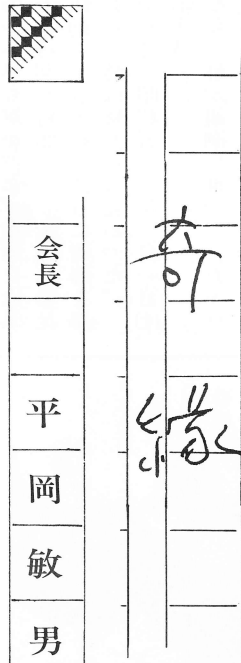
この大谷君から、昭和二十七年に、一葉のはがきをいただいた。こう書いてある。

「突然で記憶にないかも知れん。一日恩師中島先生を訪ね、小学校時代の同期の消息を知り懐しくなつてペンを走らした次第。」という程度の簡単なものであった。このとき大谷

われていました。

小学校五年のとき倒産し、四条二十丁目に移転し、納豆売りなどしたが、貧乏のどん底生活で、我儘いっぱい、私の私卑屈な意気地ない少年になりましたが、貴兄は小学五年で旭中に進学するし、当時秀才と驚嘆し、羨望したものです。

旭中四年のときかな、僕は旭中の給仕になるし、貴兄は四年、小学校六年から進学した寺原君達は三年という立場であったことを思い出します。いつも、あの秀才はどうしているかなと思ひ出されるのですが、旭中四



会長

平岡敏男

君は「札幌郡広島村立大曲小学校長」であった。文通はそれきりで絶えていたところ、五十五年六月、こういう手紙を手にした。

「突然の手紙で失礼します。六十年前の小学校の思い出からはじまるので、同姓同名であれば破り棄てて下さい。そして、この失礼の程を幼児から持ちつけてきた純真な奴だと、寛容して下さい。」

小学校は旭川中央小学校、担任は中島庄左衛門先生。小生は当時三条十三丁目で大谷旅館をしていて(長男坊)大谷外吉幼時たちちゃんと言

旭川会設立の思い出
松原 利治

生れは、大雪山の麓、旭川市外鷹栖町。小高卒後家業の傍ら生保界に入り、厳しい自己管理のもと現在に至るまで、この道ひとすく四十六年病気で休んだ事なく至極、毎日常社恩を感じて精進している。O型、

美術仲間の者の表彰会があった時、旭川中学出身の平岡氏と逢い、名刺交換をしたと言われて名刺を拝見し消えうすらいでいた思い出がよみがえり、現存して居られて予想通り活躍していることの喜びが早速ペンを走らせた訳です。

小生は旭中の給仕をしていて、皆の学生服を着ている姿を羨ましく思い(当時着物を着たから)官費の旭川師範を目ざし、同級の新庄芳夫とともに卒業まで同じでした。

その後四十年の教壇生活を平凡の中に過し、退職後幼児教育のためにと幼稚園を経営しています。今年古稀を迎えましたが、若いお母さんや先生、幼児にかこまれて元気で居ます。

長生きしているということは幸いです。逢えることがあると思います。お互いに健康第一に頑張つていきたいものです。」

私は、大谷君のお許しを得たことにして手紙の全部を引用し、また他のクラスメートのこともかいた「小学校の級友」という一文を旭川で出ている雑誌の五十八年四月号「豊談」に載せてもらった。そのコピーを私は大谷君に送った。しかし、返事はなかった。時折、そのことを思い出して気になっていたところを野瀬さんにお目にかかった。奇縁である。大谷君の手紙にあるように「長生きしていることは幸いです。」

(毎日新聞会長・題字筆者)

近々東京旭商同窓会幹事会が、会場を朝日東海ビル二十七階会議室に設けて開催される由と聞き、私もオプザーバーとして出席しました。当時の旭商同窓会支部長は谷武雄氏(故人)であり、快く東京旭川会の設立

●会則一部改正について

(役員の変更)

第八条 会長、副会長、幹事および監事は、総会において選任する。

2 常任幹事は幹事の中から互選する。

を次のとおり改正する。

第八条 会長は総会において選任する。

2 副会長、常任幹事、幹事および監事は会長が委嘱する。

(総会)

第十三条 総会は、次ぎにかかわる事項を決議する。

1 事業報告

2 予算および決算

3 会則の変更

4 其他会長の付議する事項

を次のとおり改正する。

第十三条 総会は、次ぎにかかわる事項を決議する。

1 事業報告

2 予算および決算

3 会則の変更

4 其他会長の付議する事項

●東京旭川会役員名簿

会長 平岡敏男

副会長 御手洗正夫、吉田敏明、大城栄子、牧田逸子、松原利治、八木祐四郎、矢野正康

幹事長 田村昌士

常任幹事 落合隆明、折登建憲、笠木真知、河端昭雄、桑本平八、武田陽子、高野哲男、長田孝雄、原公朗、花輪元治、広瀬芳一、堀川和延、本間敏弘、吉田律子、南 栄二

幹事 伊藤一男、板倉美代子、大矢健、大久保藤次郎、大西幸男、奥野寛一、大石武夫、押味信子、加藤辰雄、河端敏博、北邑芳雄、須藤正一、須藤智恵子、鈴木豊子、長坂広光、西田育子、羽島利雄、福原博子、三浦清史、矢木茂昭、吉田雅俊、横田茂

監事 竹原茂雄、黒崎弘

●寄付受け(順不同)

新副会長の あいさつ

"どうぞよろしく"



相互の親睦を深めたい
八木 祐四郎

皆様からの協力を
矢野 正康

様々な新企画を
大城 栄子

同じ故郷を持って
牧田 逸子

已年生れ。
東京旭川会の創立の思ひ出は、私が北海道倶楽部役員と在り、北海道ユネスコ協会の事務局長をして、関係上、ふる里会の結成をしばしば耳にする時、旭川会の結成に郷土の一員として力を注ぎたく、先輩諸兄にそれとなく旭川会結成が遅れている理由を聞きますと、私の様な関係のない者が話し合う機会を与える事が必要になり、早速ユネスコ協会に旭商出身者三井勲氏、吉田三郎氏、大西幸男氏、その他に意見を聞き、

この度、会長から副会長の委嘱を受けましたが、年代的にも若く、旭中同窓会のなかにも多くの諸先輩がおられるなかでご指名をいただき恐縮いたしております。会発足後、五

東京旭川会は三十六万人を超える躍進旭川市と、東京および周辺の旭川出身者の懇談の場であります。お互いに、あの故郷を偲び親交を深め

旭の名に負う大雪山よ
入日の輝く忠別川よ

旭川在住の学生時代に何か事ある度に歌った、旭川市立高女の校歌です。

私の青春時代は戦時中であり、当然に第七師団のあった軍都・旭川はカーキ一色でした。いまの「平和通り」が「師団通り」といわれた時代です。師団通り、といつても一般市民は、言葉の上で「しだん通り」

年と共に東京旭川会も益々盛会を迎え、会員の一人と致しまして大いに歓迎に堪えません。この「東京」という大都会の中で故郷が同じということは、掛け替えのない強みであり、また頼もしく、そしてまた楽し

を承諾、満場一致で決議された。いよいよ発起委員会の開催までこぎつけ、各校代表並に一般代表二十数名により発起人委員会が開催、五十二年五月朝日東海ビルに於て準備委員会を開催し、会則、人事について打合わせが行なわれ、重要ポストの会長候補として、現会長平岡敏男氏(旭中出身、毎日新聞社長)が最適任者であるとの現顧問小坂佐久馬氏(当時教育出版社長)の推薦により、数名の発起人が毎日新聞社に訪れ、経過を説明、快く会長就任

十二年十二月から事務局をお預りして今日まで皆様のご理解、ご協力により大過なく経過してまいりました。今後は微力ではありますが、会の目的であります会員相互の親睦、融和の

て参りたいと思います。

今回、副会長に推されましたが、もとより未熟な者ですので、皆様のご指導とご協力で東京旭川会の発

ないしは「シダン通り」位の語感にしか受けとめていませんでした。

お祭りといひ、買い物といひ、食べものといひ、このシダン通りが中心で、いまでも懐かしさがいっぱい

さて、私はこの北国の都、旭川を離れ、長い間東京で生活しております。念願の「東京旭川会」が発足して、ことしで八年目を迎えます。ふるさとの集い愉しきかな。昨年の総会で、ふつつかな私が副会長という

い仲間でありました。それだけで至上の喜びと致しておりましたところ、この度は入会後未だ日も浅い私如きに、副会長などという大役を頂き、驚きかつ恐縮致しております次第でございます。この上は皆様のご指導ご鞭

回を重ねる事七年、毎年の如く会員増大し、現在ふる里の会催しに付、当東京旭川会の存在は誠に意義深く、故郷旭川市民の交流に大きく貢献しています。

(朝日生命顧問)

輪をさらに大きく深いものにするため、会員皆様とともに頑張つて参りたいと存じます。

(東京美装興業代表取締役)

展に微力を尽くしたいと考えております。

(株式会社セーキ代表取締役)

大役を仰せつけられました。果たして努めますかどうか、いささかの不安はありますが、私なりに一所懸命にするつもりであります。

こうした集いは、やはり楽しいものでなければなりません。何か新しい楽しい企画をと考えています。と同時に、一人でも多く会員がふえて「東京旭川会」がますます盛んになるよう願っております。皆様、一層のご支援とご協力を。

(大成印刷株式会社取締役)

礎を頂き、この会をより一層愉快な会となるよう努力させて頂きたいものと念願致しております。何卒よろしくお願い申し上げます。ご挨拶に替えさせていただきます。

(桜花会東京支部長)

旭川市長、旭川市議会議長、川田正則殿、五十嵐広三殿、旭川西武店殿、イトーヨーカ堂旭川店殿、藤原ラーメン殿、朝日生命保険相互会社殿、大平興産株式会社殿、五建工業株式会社殿、東京美装興業株式会社殿、株式会社セーキ殿、東亜国内航空株式会社東京支店殿、毎日新聞社殿、株式会社大心堂雷おこし殿、昭和実業株式会社殿、昭和工業株式会社殿、橋詰商店殿、株式会社プロセスアーキテクチャ殿、薬日本堂殿、ニッカウイスキー株式会社殿、サッポロビール株式会社殿、合同酒精株式会社殿、株式会社十勝殿、男山株式会社殿、株式会社鴻池組殿、以上二十五件。

安藤正人氏

当会創立時から会の運営の中心として熱心に活動して来られた元常任幹事・安藤正人氏は昭和五十八年五月二十一日、胃がんのため、入院中の日赤医療センターで逝去されました。六十四歳。謹んで哀悼の意を表します。

●郷土訪問旅行団参加者

団長・平岡敏男、太田剛、勝田正之、鈴木与之助、宮下博夫、古瀬猛男、花輪音三、花輪和子、広瀬芳一、花輪元治、河村尚之、鴻上修一、福居浩一、福居信一、小林典司、桑本正、森基、三浦清史、熊本啓一、竹原茂雄、桑本平八、佐々木憲一、松永常蔵、高橋文子、中の方、岡村勝夫、松田敦、松田貞子、大城栄子、山本文江、直井勲、竹下朝一、竹下タミ、中山精二、中山喜美代、鈴木繁、中陳国光、中陳マエ、田中千悦子、田中文子、茂木幸子、笹谷重矢、小泉操、柴田智恵子、土井磨智子、吉田律子、星野孝枝、石井ツル、藤井繁、田村輝、西元正利、松永泰子、荻野京子、戸村美子、楠真知子、小林光政、石本チヨ子、伊藤元夫、河内秀喜、岩瀬四郎、中田登幸、新田知成、河野宗夫、深見一太、富田充泰、大矢健、以上六十六名。



ニュース提供：
旭川市東京事務所

北海道の発展を願う

小沢 仁良
(旭川市議会議長)

私達が住む北海道は百十五年の歴史があります。とくに、過疎と過密の問題、地域間格差の解消など常に古くて新しい問題であり、解決しなければなりません。北海道の過去を振りかえってみますと、資源消費型の経済であったためにこうなつたのではないのでしょうか。北海道は世界でも稀にみる短期間で、もっとも近代的な社会を築きあげたといわれていますが、それは北海道には非常に豊かな資源があつたからだと思います。

しかし、北海道に対する中央の見方は非常に厳しいものがあります。補助金の北海道特例の廃止など、北海道の育成は終つたとする考えであります。第二次臨時行政調査会の最終答申において提起された北海道開発庁の統合をはじめ、国鉄再建計画に伴う国鉄地方交通線の廃止などは日本の二十一世紀の問題を解決するといわれている北海道において、一歩も後退はゆるぎないと思います。北海道に住む人の九割が北海道に住みたい希望を持っているそうです。それだから北海道を厄介道と呼ばせたくないのです。

旭川空港運用時間延長

旭川空港は、二百五十七億円の巨費を投じ整備され、北海道の拠点空港として大きな役割を果たしていますが、昭和五十七年七月、ジェット機就航に伴い、今後ますます増加する航空需要に因應するため、旭川・東京間の日帰り可能な運行体制の早期実現を図ることが緊急の課題となつています。旭川市ではその実現をめざし、現行の空港運用時間の八時間を三時間半延長して十一時間三十分とするよう、国に強く要望しております。

現行での運用時間では、東京の滞留時間(旭川から一番機で東京に着いた時間からその日の東京発旭川行最終便の出発時間までの時間)が二時間程度では、日帰りはとうてい無理ですが、運用時間が延長されまると、滞留時間が約五時間から七時間に延長され日帰りが可能になるばかりでなく、例えば現行では二泊三日の東京滞在日程が、一泊二日に短縮することも可能になり、その実現に大きな期待が寄せられております。

旭川市スポーツ賞制定

近年、スポーツの市民参加の場が拡大され、多くの市民が積極的に参加されていますが、体育の一層の奨励と振興を図り、スポーツの町としてより充実するため、新たに旭川市スポーツ賞と同奨励賞が制定されました。賞は、市内に居住する個人、団体を対象とし、スポーツ選手および指導者として功績のあつた方並びにスポーツの普及振興に功績のあつた個人、団体に對し贈られるものです。表彰日は、毎年二月三日曜日(冬期市民体育の日)で、としは二月十九日です。

3/20旭川国際バレー大会



ふるさとの早春の雪原を駆けて快い汗を流してみませんか。

○全日本歩くスキーの集い
○クロスカントリー競技

○申込期間 昭和五十九年二月一日から同二月二十九日まで

○申込先 〒〇七〇 旭川市七条通八丁目左八号北野ビル分室、第四回旭川国際バレーサー大会組織委員会事務局

○問い合わせ先 バレーサー大会事務局(旭川) 電話〇一六六(二三) 八三〇〇番

旭川市東京事務所(千代田区麹町三十五) 電話〇三(二六五) 七八五五番

ふるさと紹介

○市民の木——ナナカマド
花言葉「安全」

春から夏にかけての繊細なみどり、秋の紅葉、そして葉の落ちたあとも赤い珊瑚珠のような実がいつまでも残り、冬には渡り鳥の餌場として一息のやすらぎをあたえる。

○市民の花——ツツジ
花言葉「情熱」

エゾムラサキツツジ、ヤマツツジ、レンゲツツジなどがあり、五月下旬から六月上旬にかけて咲きはこり、花の色は多彩である。

○市民の鳥——キレンジャク

ナナカマドとのかかわりが深く、初冬の頃、ナナカマドの実にキレンジャクが群がる光景は、冬の風物誌として広く市民に知られています。

キレンジャクはシベリアで繁殖し、冬の間日本に渡ってくる冬鳥で、ブドウ色の地にパステルカラー調の赤と黄の配色が美しく、また冠の羽が風になびく姿は独特。



○市民の虫——カントラン

比較的北方系のこん虫で、全国的に分布していますが、本州では高原のような高いところで見られないのに対し、北海道では平地で見られ、特に旭川ではその数多く、河川敷や市街地の緑道まで進出している。鳴き声は比較的低音で美しく、ルルル……と音色はきめ細く優雅で、秋の虫のなかではスズムシ、マツムシと同等、あるいはそれ以上に評価されている。

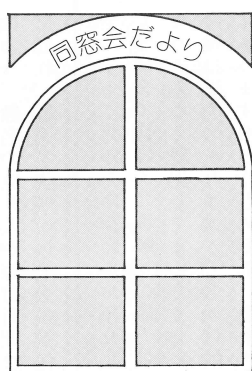
場は、池袋東方会館でしたが、趣向を変えて、また、お当番になられた昭和十七年卒業の方達の地元が、何かと便利という事で、新装も新たなザ・エルシイと決定。

岩野加代子さんの名司会で運ばれました。今回の当番をお引受け下さった方達は、一度も経験なく、当番ができるかどうか大変不安がついていました。前年の当番昭和十六年卒業の方達とのパトントッチが良かったのと、塩谷キン東京支部長、滝沢かおる、関口和子両副支部長ほか役員の方達の協力により、見事な楽しい同窓会になりました。

ご出席の先生は、鈴木秀子(旧姓溝口)・木村くら、小櫃富士江(旧姓中村)・山名ハツノ(旧姓千葉)の四人はかに会員とで四十人程でした。

当日は、少しでも多数ご出席いただきたく、「母の日」を除きましたが、出席予定の方の突然の欠席があり残念でございました。

毎年のお当番は会員の申し合せにより、自動的に順番にいたしました。が、毎年お引受下さるときは、初めてなので不安がついていらつしやうりました。時は、皆さん揃って「お当番をしてよかった」と申されます。久しく疎遠だった同期の友達との交流、そして先生方および先輩、後輩との親睦は一段と深まり、郷土旭川に生を受けた喜びを再認識いたしました。と喜びをかみしめておられます。そして毎年の同窓会には、何があっても出席したいものとお互いに笑顔で約束をして散会いたしました。



緑蔭会にもっと多くの 人たちが入って!

緑蔭会(北都高女・旭川市立高女)東京支部の昭和五十八年度同窓会は六月五日(日)ザ・エルシイ(川崎市中原区小杉町一四〇三)で開催されました。過去三年間好評なままに会

「ナナカマド」の奉納

木内 綾

渾身の力をふりしぼって、という状況がある。五十八年の秋、奈良薬師寺の金堂に優佳良織の幡四流を奉納させていただいた時は、文字通り「渾身」の力だった、と思う。

天平文化の最高傑作、といわれる薬師如来像が安座します薬師寺金堂内を荘厳する幡の制作をと、いわれた数年前、その晴れがましさととは逆に、とてもできそうにありませんと当初ご辞退申しあげた。しかし、心の底では何としても織ってみたいという気持もあった。それだけに、

読売新聞社主催の東京・大阪・九州での優佳良織の作品展のお話があった時、メーンのテーマを幡の習作で発表したいと思った。

予想通り、幡のもつ約束ことは複雑難解をきわめ、染織にとつての制約は多い。頭をかかえ、途方にくれることも多かった。習作では、北海道の四季をテーマに「ミズバショウ」(春)、「ハマナス」(夏)、「ナナカマド」(秋)、「流水」(冬)を選んだ。幡頭は従来の金属に代え、北海道の創成の樹ハルニレの埋木で制作した。工芸

当日撮影したスナップ写真は、会員各位に差し上げるように心がけ、また、希望者には全員の記念写真なども用意したし、当番が出席者会員に送付するなどのサービスも一所懸命で、ひたすら会員の親睦に努力いたしております。それが、また仲々の好評のようでございます。

五十九年度同窓会は、五月二十日(日)午前十一時受付、新宿コマ劇場前の地球飯店で開催。会費六千円。年会費壹千円。当番は、昭和十九年度卒の方達です。

連絡先は、昭和十九年卒業、石原愛子
中央区新川一十一十四
電(五五一)五四五〇
(関口和子記)

▽旭川商業同窓会東京支部総会
昭和五十九年三月九日(金)午後六時から
会場は茗溪会館(文京区大塚一―五―二二)、地下鉄丸の内線茗荷谷駅より徒歩二分、電〇三(九四三)〇三二―

連絡先は合同酒精本社営業本部・羽島
電〇三(五七一)八六四一

▽桜花会同窓会(旭川市立高女) 昭和五十九年十一月二日(金)午前十一時半から。会場は東京大飯店(新宿伊勢丹裏)

連絡先は、港区白金台三―一六―二六、北山博士
電〇三(四四三)二七七四

▽旭川東高同窓会東京支部の昭和五十九年度総会
昭和五十九年三月十三日(火)午後六時から。会場は東京海洋会館(新宿区百人町)

連絡先は東京美装・桑本
電〇三(三六三)二七二一

て北海道の風土を、染めと織りとで表現する作品を生み出す、クリエイティブな意欲にかられて、ひたすら機に向かっていた。

しかし、私にとっては、染織作家としての立場と同等に、あるいはそれ以上に大事に考えていることがある。それは工芸活動として、北海道に生まれ育った染織工芸を、ゆるぎない土着のものとして根づかせたいということである。そのために数百人をこえる職員や会員の人たちと一緒に、二十数年の間、苦楽を共にしてきた。旭川市郊外の神居町の高台に工芸館も建てた。

この受賞の日、優佳良織工芸館の館長をしている長男和博の作品「大雪の秋」が、日本民芸公募展で、特別賞として大阪市長賞を受けた。受賞の話ばかりで恐縮だが、ふだんは工芸館活動は館長の長男にまかせることが多く、そちらに、より比重がかかっている。従って作家活動は私の方がまだ主力に、という形で、親子で役割が決まっていたかのようだったのだが、この日、それが逆転した。やはり私も息子も、それぞれが作家活動と工芸活動の二つを背負いながら進んでいかなければならないようなのである。

優佳良織工芸館は独特の雰囲気をもった建物。(円内筆者)



館の木工室で何十回と試作を重ねた。幡足はモールド状に織った。

四季を表現した習作の幡の中から、故郷旭川の象徴ともいえる大雪山の秋を真紅に染める「ナナカマド」のテーマ作品を選び、これを四流そろえて薬師寺を参詣した天武天皇忌に金堂に奉納させていただいた。

無事奉納のすんだ今、私はこんなことを考えている。北海道の、旭川の子供たちが修学旅行で飛鳥の古都を訪れた時、また旅行などで道内の人たちが薬師寺へ行かれる機会があった時、そこに北海道の織物、旭川で生まれ育った織物を見た時、どのような感想をもってくれるだろうか。天平の古い文化の中に、北海道の、自分たちの郷土の染織が混然融合されていることに誇りと喜びとをもつてくれるに違いない。そのことを考えながら、私は「渾身」の力で幡の制作に取り組んだのである。

作家活動の一つとして、これまで作品展をくり返してきた。国外での作品展も多く、最近招待による個展もふえた。それにともなう受賞などの機会もふえた。

私は染織作家の一人である。そし

と何度か思ったことがある。工芸館活動に専念できたら、と思う時もあった。どちらも片方において行き詰まった時のくりごとである。作家と工芸活動との両立は、時として、難しいなあ、と嘆く局面も出てきたのではあるが、しかし、私にとってこの両方はまったく不可分のものなのである。工芸活動のために私の作家活動がある。作家活動は工芸活動の活力に支えられている。

幡の奉納の一週間後、サントリ―

地域文化賞をいただき、旭川へ帰ったと思つたら、また大阪へ飛んだ。作品の受賞以外の賞は初めてだが、地域文化――つまり工芸館活動が認められての栄誉は、実にうれしいものだった。職員や会員の人たちの顔を次々に思い出していた。これは同志的感情につらなつた私たちみんなでいただく賞だった。続いて北海道新聞社からも道新文化賞をいただくことができた。この賞も地域文化振興によつてであった。

事務局日誌(57・9・11・58・8・31)

▽9・3 旅行会打合せ▽9・4 会計監査▽9・17 第二回実行委員会、旅行会打合せ▽10・5 旅行会打合せ、第一回幹事会、総会案内発送▽10・11 第一回郷土訪問の旅▽10・14 吉田副会長外九十七人参加▽10・29 即売係打合せ▽11・3 受付係打合せ▽11・8 旭川市長へ祝電(市長当選)▽11・9 第一回常任幹事会、第三回実行委員会▽11・16 第六回総会並懇親会(ホテル国際観光)午後六時▽11・24 堀川常任幹事来局(総会会計事務引継)▽11・25 南常任幹事来局(ななかまど原稿の件)▽11・26 落合常

プラスリー
ル・コフレ

プラスリーとは聞き慣れない言葉だが、食事だけでなく、軽くオードブルをつまみながらお酒を飲むという、居酒屋的な感じのレストランとカフェ、バーなどの長所をミックスした新しいタイプの店。ル・コフレとはフランス語で小箱という意味。フランス料理を主にしたレストランでありながらスタンドバーを備えている。

赤ちょうちんというイメージとは全然異なる白を基調としたインテリア、間接照明で明るく清潔。メニューは魚貝、肉、野菜からデザートにいたるまで盛り沢山で、バラエティーに富んでいる。選ぶのに迷うときはランチメニュー、八〇〇円、一五〇〇円、二五〇〇



任幹事(総会即売会の件)▽11・27 三原旭川市議来局▽12・6 第二回幹事会▽12・8 御手洗副会長来局(打合せ)▽58・1・7 落合常任幹事(総会即売会の件)▽1・19 南常任幹事来局(ななかまど発送の件打合せ)▽1・20 第三回幹事会▽1・28 南常任幹事来局(ななかまどの件)▽3・7 前副会長長戸馨顧問ご永眠▽4・12 第四回幹事会▽5・21 安藤正人常任幹事ご永眠▽6・28 第二回常任幹事会▽7・27 旅行会打合せ

●昭和五十七年度収支決算

昭和五十八年八月三十一日現在
(収入の部)

繰入金	三五五、〇八四円
年会費	五八五、〇〇〇円
五十七年度総会費	一六、五〇〇円
名簿売上代金	一、五一八、〇〇〇円
寄付金	三、〇〇〇円
雑収入	二、三三〇円
合計	五二、五三五円
(支出の部)	
懇親会費	二、八二五、六九〇円
印刷費	二六四、一二〇円
通信費	九八、九〇〇円
会議費	六四、五〇〇円
事務費	七、九八〇円
交際費	七三、〇〇〇円
手数料	七、五八〇円
合計	三、七五〇、一〇〇円

会副会長、旭商同窓会東京支部長。
新宿区新宿三二九一
三越新宿店8Fグルメ館
電話 〇三(三五八)八一五一



神居古潭のコタンである。アイヌ語で集落、部落という意味。

店主の先々代・加藤喜助が富山から旭川へ開拓民として移住して以来伝えられたもの。当時の未開地の農民の大きな楽しみは祭りごとなどの時に造る郷土料理であり、乏しい材料の中からのいろいろな料理が工夫して造られたが、その中でも当時のままの手法で代々造られてきたのが、この押し寿司。

さけ、たらこ、かずのこ、うに、うめなどを使い、それぞれ石狩、利尻、札文、知床、十勝、古潭と北海道の土地名を付けてある。北国の海の味が美味しい。富山出身者の多い旭川会員は、昔、親が作

雑費 六八、〇〇〇円
支出計 七、七〇〇円
繰越金 七、七〇〇円
合計 一、四八〇、〇〇〇円
昭和五十八年八月三十一日
東京旭川会会長 平岡 敏男
常任幹事(会計担当) 八木祐四郎
以上の会計事項について監査の結果適正に処理されているものと認めます。
昭和五十八年九月二十日
監事 竹原 茂雄
黒崎 弘

編集後記

☆総会は、赤坂の東急ホテルで開催されたが、前回の八重州観光ホテルにく

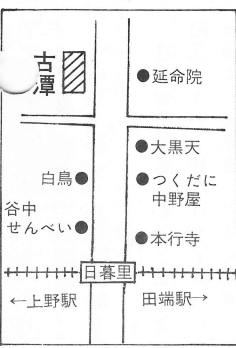
つてくれたこの味を思い出す人も多いのではないかな。
魚は焼いてあるので日持ちが良く、旅行、集会などの弁当、蒔ものに好評。

五十七年二月開店の新しい店。明治座、歌舞伎座のお弁当にも出ている。値段は四五〇円から七〇〇円と手頃。

付近は経王寺、本行寺、谷中墓地、朝倉彫塑館……と見どころが多いので、散歩がてら寄られては如何。国電日暮里駅南口から御殿坂を徒歩二分位。

なお店主加藤玲子氏は市立高女から東高に転じ一回卒業。東鷹栖出身。

台東区谷中五十一一五
電話 〇三(八二四)三八七五



らべて、広さも十分あり、これだけあると会場内もゆとりがあつて色々の方々と懇談いただけたのではないかとと思う。受付の席も会場内に設けて、いつもは裏方さんに終始して総会の雰囲気には接する機会がなく、腹ペコのまま苦勞した係の方々も満足できたのではないでしようか。

☆本紙に貴重な投稿をいただいた木内綾さんは、神居の高台にメルヘンな優良織工芸館を建築され、北海道の自然をモチーフに糸を紡ぎ、染め、そして織ったその作品で奈良薬師寺の幡を奉納され、国内のみならず海外でも高く評価されております。このたびサントリ文化財団の地域文化賞、北海道新聞社の北海道新聞文化賞を受賞されました。また、長男の和博さんも日本民芸公开展特別賞を受賞され、お二人の受賞をお祝いする会が旭川市ニュー北海ホテルで十二月五日開催されましたので、本会から祝電を打電致しました。

☆旭川が歴史を重ねると、東京の旭川一世も高齢となり、二世、三世の時代となる。旭川市当局筋と東京旭川会の幹部の間で、非公式ながら、三世(つまりお孫さん)を一世の故郷へ年一、二回は「里帰り」するのの一興という話が出た。あのふるさとに大自然がある。実現までには具体的な話し合いが必要だろうが、航空券割引などの措置がとれたら、参加しやすくなる。☆一九八三年も去る。今年も故郷を愛し続けた故郷武雄副会長の一室を拝借して、本紙の編集を進めた。ふるさととは、遠くにあつて思ふのか、外は木枯しの巷……。

編集委員

南 栄二
田村昌士
落合隆明
関口和子
笠木真知
伊藤一男
(順不同)